夢想心兵衛胡蝶物語前編

五

夢想兵衛胡蝶物語巻之五

東都　曲亭馬琴戯編

貪婪國

貪婪國は魚あり。その名を饕餮と云。饕餮の大慾銭百八万貫に成れば。化して鳥となる。その名を恪鷄とのゝ。鷄の慾面厚きこと銭千枚。そこに飛ぶ。その喙。垂涎の嘻のごし。この鳥や開運と月醉醒に至らんとし。醉醒は強欲の山あり。吝嗇三千畏。学ぶ上小摶りて。貪ること九万鷹貸小六ケ月をもって限とし。野夫や甚六や。文盲の息をもって相吹くこ。天の蒸くるそれ天竺邪。その遠きに至り極る所のらん邪。下ること又ゝ木仙の如し。と楽屋へ落ちと荘子の故事附逍遥遊よりなれども。ゝ勇気のあるものでも。彼大鳥は洒まて人生るゝ。ひれ安、ゝ。

姿想兵衛が醉醒山の母とりあへず。貪婪國の大悪鬼。恪鶚を搖去はる。
驚ふるへ小人島の同行小吳のごとくにいろめき。雲を震と
飛び往よ。その怖さ若し。譬へべきものなし。紙老酸小祭て國を直ち
誠云いのさとりのごとくにて。そも命はるかのと堂ゐはそも今さら小異
國へひとり張されば法てこまる。傑屋の太郎どのもまりまさど。最惜といへて
気のちぶ山中左衛門はるへ。寒よ三寸息絶まば。萬ゐ休と。旅魂今
夜誰が家小誘らんとあがをく長まるり。めり行よ吝鶚が姿想兵衛
を祇しまる。海上三千餘里が往を只一伸小飛へ。貪婪國の吝嗇郎。字錢
城といへ都の辰ゐとく翔ざる。阿太次計梨の木の股へ。ぐっさりとうちあろせ
ば姿想兵衛が息絶て。ちぐ生死はちゑざるる。ちれ。ものの悪鬼物惜
鶚の癖のまばまぐ格別よ拔も鐵らねよ。のちろ物をひざくと。咲へて

ちるまへ憤んりのく。是はのまくちまろてあくへ。いまぐ鞘をもつけ。て亦
揮ゐあと飛去ぬ。ちるぐ。と姿想兵衛が半晌のまろのりて息吹。
さそいまぐ死ざるる。のちんりの。と鉄びるぐ。高き横よ刃をあげば。木
伯ひりん。ちもるく。十方ふ。るあ。ものれ。凡長寺の慾海和尚。そん
寺へ紋繻子の袈裟被て。香煙の法衣殊捲げ小。射利人とへ。草履
取。侵欲とへ。子坊を供へ。木の下ちく過ぐ。姿想兵衛が
こを見く。地獄で仏と。大き小鉄び。掌をうれ。声を揚。喃く聖ゐりの
さん。是は同宰國の旅人ゐ。夢想兵衛といへりのるぐ。不圖ゐ。ことでお年
國を。慾國を徧歴。近屬强欲國よ拔ぐ。天狗ゐ。熊鷲ゐ。怕
ちれ大ゐ小ゐ。ゐまて。の如へ。紀誘され。進退退。究て。難儀至極。のれ慈
眼視。衆生の背をり。扶ちるこ。びゐと。拳を揚て憑ひるぐ。慾海和尚

精を入のげて。そくそくそれへ気の毒千万。残ふびるるるとるべ。人を救ふ
ハ出家の役なり。冥加銭の寄少よりて。相済よ百べ。拙僧其途
をいそぐ。直を限ゆ。と慾ばりるて寛ハ。養老兵衛呆果ども
さても貪婪とい人間ハ。第一よるるて。もそ絞ゆ。人あハ木の端り卅のごれの
ゆふいのく出家とる。人の難儀を僥倖ゆ。ゆ申ける技計口上慣ても
ふしとそくとも。狼貪愛悉の風風るれば。俗人ハるゆ。ひゆゆる。この和尚を
ゆ逃ゆ。後ふ勸解ともるのげくこもるして。こまる人るくハ。賂の早贄るる
ゆふ。ゆ乾ふるるるとべものじ。忻ふふ手るゆ。と思案ゆ。木の秒高く
声ゆるのげ。寛ハ知義ゆるる。某懐中よ。路銀澤山所持いるべ。ゆ
ゆよ寄進ゆべ。と餘義るくいべ。慾海和尚。ゆて莞爾とゆ笑を
ゆハ。ゆるるく。残るゆ衆生ハ度ゆ。ゆ既よ騒の金ゆ。救ハべく。

と回答ゆ。懐るる紙入ゆる。豆箕盤を取出ゆ。ゆづゆの樹のるさが五六
尺もゆべ。ゆハ掛る足代の板九枚を十本とゆ。この代銀が八十目。
そこの外ゆ運送の車力を。ゆ貳拾百文とゆつゆて。外ゆゆ索
十把。四百文。この人足を十人とゆ。三貫文。ゆれば。この入用が銀八十目と。
残四貫六百文。ゆゆ。ゆ今日有徳るる檀方ハ非時よ呼ゆて。ゆる
るる。殊ゆ一周忌の遠夜るれば。食事も格別のるるゆ。ゆるる飲
る馳走ゆるゆ。宝の山ハ豆端るゆて。腹を空くゆる損ゆをゆゆと勘定
ゆゆ。ゆ牽猪を五匹とゆて。主従三人で十八匹。現蓋も二面とゆ。八匹が
りのハゆゆ。ゆ。吸物が三ツ。味噌吸物が二ツ。主従ハ生ゆ吸物の数。二
五十五碗を。三ゆ積ゆ。四匹五ゆ取肴二ツ。猪殻二ツ。ゆを三匹積ゆ
ゆく。上下とゆれば。三八ホ四匹。酒ハ一銚子。五合宛ゆ。主従三人で十銚子

は轆くおるべし。其の酒五升。一升あたり銭百八拾文ずつして。壱貫四百十六
文。引物の果子は壱分。饅頭三ツ。米饅頭二ツ。大落雁一ツ。花ぼうろ二ツ。〆人
まへ七ト分して。三七二匁壱分。上包の粘入六枚で十八文。紅白の水引三把
で六文。さて施主で飲食しまうで。本回向のさまと持仏へ対ひ宗旨の経
文此三なりく。口のうちでうなると共に。これから布施が金百疋。弟子の僧
慾は銀一両。役者の冥利とて三百文ぐらゐを一トまとめに締て見れば。銀七拾
弐匁八分と。銭壱貫七百四十文まぜこぜなり。ある結構なる檀那を庵略
なして。餓頃よ病気となりふして。使僧をつかはされしても空ひで太十
まさ。其の進物が大杉原一束。春野香といふ。長線香十把。霊前へと
書て出すと。其の入用が大杉原一束で十匁。春野香十把で二百八十文。
上包の粘入水引が三十二文。惣高しめて見れば。百六十弐匁八分と銭六

貫六百五十六文。是を両に六貫八百がへの金にして三両弐分弐朱と。
四百五十七文となる。これはおん身を助んでもこれらが所得なれば冥加金
おはめども人の命は千金にも買まじねものなれども。それら出家のなれば。
慾をはなれて相談すべし。永代庫裏の普請料として。只今五十両寄
進あるべし。志あると見ば二口しめて五十三両弐分弐朱と四百五十七文なり。人の
命と引替に。其の金銭を遁るもなるべし。欺ましく給ふべし。めし鐚銭一
文なりとも不足せば仏縁なしと諦めたまへ。と足えをとんで冥へば。慕想兵
衛うち点頭。何がさて抜からしてあつらば五十両や百両の金は惜からず。
が、それより旅にそそられ。路銀は懐にあり。この身腰が重くて歩行がたし
とうまれ相談にはのらぬどもあらば只今手つけ金として五六両置べ
べし。犬の糞のかけ処へそつくりと投おくべいよまでは。ねがふも随分切ましの

貪欲
因る
縛り梨
垂名
ベカラン

城
くうあ和尚

るん小判をとりあつめて賣へば。爰恵兵衛ハ笑ひ乍ら。それハ偽ま
疑ひふかし手にけを遍与ハ中をけをとゞめ。まゞ足代の九枝もんぞのり
その金紙ゑんさらつて。隨得寺へ移轉されても。追上るゝ枝ま栖む。
猿が併でもいやるゝ。疑ひこちまもの。殘ゞよのれば。四海こゝ兄弟
ぶんと賢者の名言。偉人とゝのまうゝ。といふまて冗しる天恵
を搔きこれハ愚僧が出損ひ。ちろ〳〵こゝで受ゞ〳〵。手を拍しまゝ。
いさゝこちら。木枝樹の下ちゝん〳〵。そのとゝ和尚背を見くり。何や
私語のひつ。法衣の裳をとれこけて。白繻子の帯ゑ捨ゝ〳〵。侵
欲坊も射利助もちろとも帯を解きひとつ繋ぎあつくゝ。爰恵
兵衛ハ樹の上ゝ。何ぞうゝぞと直下ゞ。三途の河越しるゞく。侵
欲坊ハそのまゝ。氏を衛ゝ和尚の股ゞ。ちろくゝと立る肩車。

へひつゝゝ牙をうゝれば。射利奴ハ結びのハゞ。茅を纏ねて右ゝ引。
師弟の接穂を階子みて。ゆゝ梢ゝ攀ゞ。ちつる茅を爰恵
兵衛が腰ゝちろくと結び著。下の枝ゝ繰おろゞ。和尚ハ足を抱
きとゝ。雑ゝ〳〵扶おろし〳〵。射利奴ハ輸を抱て。ちゝ〳〵ゝ
ゝる爲体。猿ゝ翼を儒しる如し。と爰恵兵衛ハ感心。そゞめて吻と
息をつけば。主従手ゝ茅紙ゝ。金ゝ〳〵ゝとゝを出ゞ。爰恵
兵衛ハ些とも驚ゞ。足代をかけゝゝば。金紙出をまんりのでもるけれ
ど。何のゝゝもなく。おゝ〳〵ゝ。ゝゝめの約束ゝゝ大ゝゝ相違ゝ。
勘定をちゝんとゝのゝゝ。果ゞ。悠海和尚ハ。ゝゝ小脱しる歯をむゝ
牛。いやくゝそれハ凡夫の牙彷手。一切績屋ゝくれハ足代をかけゝ
とも。かけゞゝるの代ゝゝゝとゝ。そちふかゝふゝゝゝ。ゝゝゝ人を招待

て。後ふくりて。ゆと死。駕賃とて。五文分。ちぶ紙。赤いと受納しと。尻ひつかげ。膝栗毛。でめつと。ぢが。淡よ。ちれて。駕賃うへ。せとい。ふのめん。やさうとて。ふろくぬ人。出家を。忻とと。五百生まで。地獄で。舌を。抜ぞと。やと。威しそんこう。賺しこう。比喩。方便。ゆこう。人為いはせもんて。爰忠兵衛。ハ。呵をとうら。笑ひ。昊代の。母の代のと。絶つた。の人。和尚の。舌を。抜れぬ。用心ちゆうこう。仏ハ。慈悲を。體と。て。学。慾をりつて。数とを。妻子。珍宝。及王位。臨命終時。不。隨者。唯戒布施。不放逸者。今世後世。為伴侶と。大集経。ゆ。説きこるゆ。出家ゆ。残を。母しがらば。何をりつて。桑門と。ん。些ハ。恥をこりゆ。とげつそうりゆ。ば。慾。悔。和尚。法衣の。袖を。掻合せ。ちちがハ。凡夫の。俄ちこと。仏の。方便を。ちつぬこう。大集経。ゆ。説きしは。物をちそる。檀方ヨ。布施をとこ。ゆ。善巧方便。加之。光明経。ゆ。乃至

得聞是経。當令是等。悉得猛利不可思議大智恵聚。不可稱量福德之報。ひと。説うけ。亦法華経普門品ゆ。若有女人。欲求男。礼拝供養觀世音菩薩。便生福德智恵男。設欲求女。便生端正有相女。宿植德本。衆人愛敬。と。説ゆ。て。慾こう。ゆ。ゆ。成仏道塞。残を。投つけ。と。腹。ちゆ。ゆ。仏ハ。ゆ。仏ゆ。金を。欲ゆ。ゆ。ハ。黄金を。りつて。ゆ。書を。泥ゆ。ちを。ちこ。ゆ。ちを。ちこ。ゆ。や。地獄の。制度ゆ。金。次第。十王が。勧進ゆ。こ。ゆ。ハ。為と。衆生の。常言。般若。貳朱。ゆ。残。こ。て。いゆ。ゆ。真讀の。施主ゆ。つ。と。汝。暇の。恨。あ。といひ。ハ。偽。そ。の。懐。ゆ。物。ゆ。ゆ。今の。一。ゆ。ゆ。推量。と。冥土。黄泉。ゆ。奪。衣。奪。残。ゆ。死亡者。ハ。と。ゆ。剥る。懐。捜。と。物。ゆ。ハ。ゆ。死。ゆ。と。抜。と。ん。

者奴逆なとのるものハ。ふとるらと左右から手をとり足をとる
鵺にかゝるゝの旅鳥刄を動さぬ羽がひじめ。鳥膚しきらし赤裸
合羽六十もさ云までもなくて帯なくてたちかと捨る。威勢よ手を捗ゆ
ハ生されども世ゝも聽べそ。野太い奴よかり合。犬骨折てかさる乃
もまらる此ゟ物と百貫の。肩よりげる古腕袍ねらふめぬと主
従が立蹴よ磯と跳る足も咽へ出ど田畊道。横筋違よ走りぬを
懸世な夢想兵衛ハ。猿臭褌ひとつの痩骸坊主が憎げや今朝
までも見たる布子の惑しくて。何処へゆかん入揩場で。猫の魅ゆ死人
のよくやうくと立よう居らう。西も東も定かならねバ。ひとり相撲ハ
とるもそれどもけふ世の人のおそひぞ。乞食さるよりなくもなし恨し
さよよ向上ればこの樹のくさら君常なく猿滑に似て。木の膚究て

茱萸を延るごとく。葉ハ一文銭に似て生肌を剥ぎごとく。果の形ハ
西瓜挖の人参果の仲ありて。べうくしとさるゝ。宝より此樹を阿
太次計梨と名つけるもまりとし。ある國でも都の人情あれ人ハ
あるもそらいとなくだろりをよふそふく。守銭城へとまづるもく抑部の
形勢ハ町條奇麗よて。庫造よ格子をそりつけ。或ハ櫻櫚林よ居宅
を構へし。或ハ硝子の長簾とくげるさし。背門で禾舂杵の音。車井戸
の轆る音の後の轆轤。析よ飯とれをならせ。夜の桿棒ハ枕元イ
をざらせ隣よ掛る用心草鞋ハ。大人國の串柿のごとく。橋に活
霖雨の番傘ハ半夏過の汁の子より多く。残ハあまれど法どいへ
て生涯股引穿づめに。主人も小厮ようちまじり主従汁の皮饅頭穿て
木の皮で傍をうえ挖煙中へハ紙よてかくけ。煙草ハ一玉六十四文青臭

のを最上とし。魚ハ塩物乾物を賞翫すれど。朔日十五日の外ハ食ハず。飯ハ黒きを厭ハず。汁ハ稀なるを厭ハねど。朝ハとくより起て竈の下のせハしかのぞなれ。夜ハ遅く寐て犬の声に耳を側て。入るを飲て出るを喪ぞ。不如意の親類へハ。年始も門礼で敬して遠ざけ。長屋の容将倹約とさるゝ名によつて。お茶漬でもといふ。勘定づくでめる女房。一騎当千までもつてまはし。在々の倅子。田畑流さを名蹟と定め。有明をあかりとして換る不定香盤をとりこ。其の膏を絞りて。机の先に火をとりし。半枚の附木を惜みて。燧を潰て草履を見せ。懇意づくでも。唯ハ通さぬ。胸中の男女母の胎内にあること四十年ふしぎをしめて生れ。六七十を一期とすれバ。いづれも志ざれて歩も年老なく。只吝嗇を事として。利の為に煩悩するとなり。爰に夢想兵衛ハ

これらの形勢に似るるび呆れて。門にさら袖につけども。慈悲善根といふ事は露ほどもなく。一艘の手の内くするものもなく。飢疲れて今ハ一歩も運びがたければ。南とうける十字街に大きなる家造の窓の下に立在バむかふより来る岩乗阿爺。七ッさがりの絹羽織かけし小紋の肩たげし霜ハ備前陶を灰にくべるる伴あり。洗ひさらしの松坂縞に木綿小倉の二重帯。曲り形なる古雪踏も。かねハ減らさぬ身ぶりなるを左手に松魚引提て。右手に持たる一把の薪を町中へ撲地とおとせしよりかい物を買ハさ成に三十二文の損をさるゝかと。ひとり言して。松魚を薪の上に載せるを何ぞくと呟くハ。捨に来たと。夢想兵衛ハ鋭しければ。眼もあなさば。貪婪面付も又切るる気ちがひハあるよ。堅木の薪を一把そえて生でかゝる松魚を捨るハ。それとてハ解せぬ奴故にしとおもふぬ。呟きは何しと。心に深く怪みけり。

浩如は亦ひとり。六十あまりの隙垂阿爺。天寛八茶灌と冗はやさ。腰は曲りそ渦の蔓墨より黒き板子顔吹作狂る杖の頭へ。ぬと掛る古草鞋。さろ〳〵と横町より。出合ひらふ顔見合せ。これは薮坂の吝平どの。どこへお出と呼びかけ。やあ。是佐堀の皺右衛門どの。頃日はひふ砂法いて。ぬれ〳〵の処へ出かけ。撫ろ〳〵のまゝ。捉れた。へ四五十金の媒いて。つはせ。貌れどけよ礼金なども。慾ぐるれて並ろもおし。餘れは受納いせ。その謝礼として松魚一本贈ト。されて却厄妖を煮て摠菜はるとは食せつけぬ魚類なく。家内の奴原飯がとまば。一トくの飯は損めり。又さ〻すれて自分人賞誉あそも。一本の松魚は食つくされど。知へ客でも来ると。ちんさらそれをんせそもおりを。どとんも又二三合の酒を損せるとも。あべ〻。吟往薪一把の損をとも。この松魚を捨るは。あるべ。鞆めれば捨人りのは醤油一合の損ろり。ちろ〳〵べろあぐる人もかべ。と。接ちそ。ぐく捨よ来ましとい。べ鍍ちろ肩を聲め。嗚呼尖人抵いそれ程は大気る人とんちろんぐ。ろ母ど焼ちまつ。ちろ。ち頃日の相場では。捨ても百がめいあるぶるぜろるやへ賣〳〵ねられは毎日変飯の食人なよ。屁の出ろの限りす。さればとそ屁もいぐらみは放ち。ど。気とりさんとちんとられは。紙袋へそっとちして。あるる。紙ちろと拾ち。是と青菰と代て。常の風あるるりて彼袋の屁を国へちっ。自拾と歯ふる道理。古草履踏切して情元ゆるく。とそ。ちる大先りのとは。日と風して結ぐ。ぐ。賢ん。ある方へ。ゆ。ち。ん。ろ。ふ。拾ひ。ある古草鞋。ぎ。ん。ろ。ん。ち。ん。紙擇こけて。残りは

貪ぬまさらせるつかり。りしその松魚を捨ぬのだ。これら直さる捨人べし。といへまて頻に天窓を搔きうち行ちまれ。近年の大ぬかり。元日から大晦日まで鯉ものて買ざれバ。向ふそく気がつかバ。是まではそゆきあへざれバ。小判朱の損をもぐりしに。さらばへ老功。感心く。銹同道とうちつきまて。薪と松魚を又引提げかうちとも世ぞ立かへまし。ハ夢想兵衛ハ爪弾して。をへぞ高く冷笑ハ。糠を拵りて釆に乃をし。脂を剥て髄を推ものハ。その出家の如し。設夫絲毫の利に走りて。その汚きとを厭ざるハ。所謂糞中の虫なり。戦國のもろ良賤貪冒。孟子利を捨て。仁義を説しハ賢なれ。天の時ハ地の利にしかず。地の利ハ人の和にしかバ。人を和するハ德にあり。兵軍旅のうのをのみならバ。商人の店を開くる。後地の利をえらぶとも。人の和なくハ繁昌せじ。道なうぬ利を貪て。一旦家を肥すとも。忽地命終るときハ。墳墓の土も乾ぬ隙に。其名ハ朽てきえうするものなり。齊の景公馬千駟ありて死するの日民德として稱するものなし。伯夷叔齊ハ首陽の下に餓たれども民今に至て是を稱るをしらずや。貪婪の人富を謀て利のために。廉食を忘まし。慈悲をおもハゞ。業者を説ぜども人倫の大道をもしらずして造悪の罪をつくる。飽まで食ひあくすることをしらバ。縦ざる不利を蓄て。その志の貪を曉らざれ。これらし餓て死するとも。その貪婪の鬼となるのみ。と格子を敲て罵れバ内より障子をさらと開て。客人さこそ寒くもあらめ。物わしくおはせるならバ。ふのこへりのへとりへを。蟄れるのうちへうりが。この家のあるじと見えて。人品骨柄いやしからぬ。嶋綱を二ッ着て桟留裏ある水豹の袞。いづれもこれぞ掛おしくて草の筆をしるす。夢想兵衛ハ

情ある。主人の云語に肖て。向外の戸を推ひ。紀尚抗より
ずりおれい。小厮二人出て。客中を誘引して廣蓋に衣裳一
襲を載て。りて出るを見れば。慾倫和尚は剥ぎ去るに衣裳をりければ。
ちちく慾られるぐらを見て。被て。舊の所へ坐る。行に小厮赤殆仕
して。飯を食し。中酒に吸物を設そえて。盃を勸む。飯は一汁五菜に
あそ。易者の食無よるを見べいまだその意を曉ずして。ちふふく
怪しつ。物問しけれバ。飽まで食てたゞめてられよりくるを待せり。
そのとき主人ちなに。義出兵衛に對ひ。それぐ。洞奥と唱えて。この里に
三世の春秋をおくりしを人もたぶ。もてるまる是又祖の賜ふ。見
泰平の時に生れ。ひしに。その幸福とぞんじ。生平に神仏を崇め。
寺たりも先祖を祭ぶ。今胥はそれ仏のあつて。親戚朋友

を招くおるれば。所酒とおのゝ。実に和尚一人を歎待ふ。
さるおよつて。鄙に多菩提所なる。凡長寺の慾倫和尚を招待しぶ。
和尚四表八表の物語。げに人を愛くのゆ。彼日本人に
あるを。あれの古掘袍を。くゝ。者奴がいるの憎しは。
懲しるとく。首尾を説おくしひしられ。和尚が来歴を
考えて。おれを和尚。の母曉らぬ。ぐ閑と呼めいく罵りの
そを傷痛け。夫れ。貴ふものゝ。梯の垢を去て。を挿湯に入る
ものゝ。虱を拾ひ捨。布子を揮て。を被る。その身の情ふ。
様されの為ぬ。めし和尚。その志の清きをりて。ぐ。
て利を説て。慾倫和尚を欺きぬ。この者に衣裳を剥ることいくとも。
彼と争ひ。和尚はあん身を扶おろして。汝へ五十餘金を

取らバ。これ寡慾の聖なり。かの財ハ与ふべき金を与へずして。剥ぎとる
衣裳を被るこれ大慾の人なり。且かの財をもつて名聞に求て。只その
小利をまとむる。吝嗇鄙志の者ハ為体をしらず。あざむき笑ふといへども。
良賈ハ深くかくして顕ざれバ。これをしらず。小をしりていまだ大をしらず。これを笑ふ
ハ蜩と鸒鳩が。大鵬を笑ふに等し。夫大に富をいたすものハ高利を貪
らずして徐々として久しく富り。強利をなす吝嗇家と。奢をならべて論ず
べからず。然バ一金の益を得るもの。一倍の利をなすといへども。子母二分なり
ならずや千万金の殖を致すべし。足利二十分が一にたらざれども。その益究て
少からず。彼豆を植るもの。一斗植るときハ。一斗の豆を取り。一斗植る時ハ
一石の豆をとる。取ることの多きハあらず。蒔く種の多けれバこそ。この為に。
貨殖の道ハ一日も利を忘るべからず。富て石崇にまさる上にありとも利と

忘るゝときハ。その財。春の日の氷のごとし。子思のいはく。道ハ一日も離るべからず。離
べきハ道にあらず。貨殖の家ハ利をもつて道とす。年に豊凶あり。貧進に納
不納あり。離るべからずして離ときハ。かへつて失ひ易きものハ利なり。たとふ。金
銭ハ。これをたとふるに一方あり。淫酒をするごとし。驕を放にせんよりハ金銭を欲
といふもののハ。実に金銭を得しれるにあらず。只金銭を水のごとくつかひ捨んと
希ふのミなる。内物百金ぐらゐ得るときハ。二百金ぐらゐしるなり。千金ぐらゐ得るときハ
八万金ぐらゐにもなるべし。然るに。ひとたびとるれバ百金ハわが手にあり。これを失ひて
その母足らざれバ別に百金を借りて亦ことごとく失ふに至る。これをもつて百金を
得るときハ二百金を失ひ。千金ぐらゐ得るときハ。万金ぐらゐ失ふといふ。恐るべきかな。
千両の分散するものハ。百両の家なり。百両の分散するものハ十両の本銭
なりて。すでに百を借り。千に百を配る。その足らざる上にありぬべし。この故に入を料ふ

ぞ。て生きものハ、これを求ちせて。亦彼蚕食貪利の徒ハ。糠を食ひ垢を
越り。理義を忘れて法度を犯し。その形ひ。道を稱ざる事を貪りぶと
いへども富貴いとよ呈ぶ。けー炭をあて炭團を造り。半紙の蒙を狩て。
銭緡を絢。煮豆を食ハ。袖口がされるとく。飯を炊きぞて食ハ。ひ
えさりハ料簡で一生痕跡をハるべ。是も亦金銭を欲しとふの。
強て紙をらされハ。実を金銭を欲といハ。ものぐされど。故蕩子の徒が
人の物を借て。返さるを比べハ雲壤のたぐひあり。世を兄弟朋友といへども。
その志を見れ。絶を愛想の場るものハ。金銭の上を。彼故蕩子の
為体を。ぶくふ。物他のものを差別をく。借りるを返さぬ。貸るをそ
めっとれハ飽ぞ飲食して。それ連日食ハ。さのハ綿帛を網世
も。ハ一枚のそくふ事を鈌ぐ。悔を恥ぞ。る人を淫ん。とする

顔ハ。この国を絶てす。人恒の産るれとれハ。恒のとろ。業をのむ
ものハ。栄業を怠るものハ。亡ぶ。人間の百楽ハ。財を聚るふ。ものハ。
富ハ人の欲とる所。貪ぶハ人の惜む。こと。人貪窮るとれハ。不良ろ
を。を発を。王ものと。富で不良の。を発をものハ。り。ぶ。して。寡
慾るれば。を。を清貧と稱を。これハ。ぶ。世を捨るふ。ぶ。世
捨ぶ。て。僅を一分を成るの。ぶ。ば。死後の名ハ。生前の富を。ば。神
仏の利益も。金銭の利益を。ぶ。この故を。君子も。銭を。兄と。ぶ。
を。を孔兄と稱を。ぶ。晉の魯褒が神銭論を。釈を。を
兄のぶ。字して。孔方と。ハ。を。を失人と。れハ。貧弱。を。を。を。
富強。異ぶ。て。飛び。を。ぶ。て。走り。厳毅之顔を。解。離。発之口を。開。
残。ぶ。きものハ。前を。處。残少きものハ。後を。恃を。矣。富人。

そぶのあくるそ
そをんかひと
からてそうく
そて牛のうちわつ
そをひとそうく人
大うちでざうり
をんせんひと
今のぜんまろ人
今のぜんまろる
動きぼくの
ゆきのぞう

哀此茅獨。豈こをいふ狂殘のるる泉るる。百姓日よ耳ひて。
その原賈ど。遠とて往ざるとる。深とて至ざるとる。京邑の
衣冠も。疲勞の講肆も。倩涛を吹くとを厭ひ。こを對それば瞳寐
我家兄を見ばば驚て視ざるとる。それば殘の祐る不吉とて。く
利あるざるとる。何るるばも書を読でもるて後よ富貴るる。
殘ハ宮よ神物るる。位なくして貴く。勢ひるして熱ひ朱門よ
排して紫闥よ入る。殘のある不危さも安らじめ死るとも活しめ殘の
さる不貴さも賤りしめ。生る紙も教さしむ。この赤よ念淨辯然殘
よあるざれば勝ど。孤弱幽滯も。殘よあるざれば拔ど。怨嫌恨も。
殘よあるざれば解ど。令問笑談も。殘よあるざれば発るど。譏よ
殘ハ耳るるて安べ。殘あるとるハ鬼を使ふ。死て人を。子夏が云死

生命よある。富貴天よある。吾以るふ。死生命るる。富貴殘ふある。何をりて
それを明をとるるハ。殘ハるる。禍を捨て。福と。敗を閑て成とある。危さ
りも安く。死るるりも生るるを。性命の長短。捐禄の貴賤
も。殘ふある。天るんぞ与るん。天も短さ不ある。殘も長さ不ある。四時い
行る。万物の生ざるとハ。殘も天よ及ばど。窮達閑塞貧さを賑ふ。
乏を倚ふとハ天も殘ふ及ばど。臧武仲が智。十。莊子が勇。冉求が藝
のど。文こを。をりて人とるのセる。今の人とるりのハ。もるるば。唯ふ方
のを。その大器るる。殘ハ誠よ。ふ。ぐ。愛とぐ。事ぐ。使ふべ
ど。もるふ殘るるりのいを。ばハ。富りのハその。ことこれ。僻ど且
妬るるる。清貧の人といふとも。殘るるとるハ。一日も生ざ。世よ日本を神
國と。天竺を仏國と。唐山を儒國とて。日本神國るるといふとも皆

ちぐく弁ろくんや。天竺仏国ろりといふとも。仏のをろくんや。唐山儒国と
いふとも。儒者のをおくんや。ちれバコゞ国を貪婪といふもこれよりおゝし。
貪る人のをおくんやあらバ。只利よりとるべし。他国より捲まろ。と言舌奕
ふ利害を竭して説諭せバ。爰想兵衛ハ嘆息し主人ハ実ま利達の人と
富貴もその道をりつてをるとなハ。辞をゞくゞ口利ふゝて模るゞ。
君子ハせゞ孟子斉よりしとなる。斉王ゝまよ兼金二百を餽まりをるを受ゞ
宋よりおいて七十鎰を餽まバ受ゞ。百を受ざゝ。七十を受るのハ豈利の為ろんや。ゆゑる友よ以取べし以取をるべ。取バ廉を傷る。以
ふべ。以ふるをるべ。ふハまバ恵を傷る。亦聖人の言よ云。道二ツ
仁と不仁ふゝ。夫利ハ禍のよるおゝをりて君子ハ利を説ゞ命よ吉凶
あり事よ前後ゝ求ゞと至るを天福とふ。君子ハ天福と受て利

を蘊ゞ。至らざれバ情貪を成る。竟天下をりて。舜よ讓まバ舜ゝまを
受ゝ。季歴その国を献まゞ。太伯ハ国を受ゞ。舜の受ゝ亦ハ天福ろり。
太伯の受ざハ。天福已よあるされバゝり。四海をりて万今の利よ比るとなハ。
萬金鳴毛ろり軽。ちろ行よ命吉の人まゝ。国中の金銭万ろゞ一を裂る
となハ。ゝへら富りとを。銭ろなりの。日くよ求て。その銭よ媚るをりて。
弊りて賢を軽しめ。ちれよりをるをあろゝとゝて。亦逆ろれ士農の上よ
あり。農ハユの上よあり。ユハ商の上よあり。字銭の人ハ。亦その下ニ。あり。
かくるゝよ。君子ハ耕せゞ。鬻ゞ。名を重しとをるをりて。利の為ゝ行ひ
と汚さゞ。漢の鄧通ハ蜀の銅山をゆろて。ゝゞろく銭を傷ゝ。終ハ
道路よ餓て死し。晋の石崇。その富貴世の耳目を驚りせし。一朝罪
せられて。双の清とろりぬ。善を独ゞと。銭を積て。道を失ゞし。富

小倉なるべしと。鄭通石崇と呉るるとなるべし。君今魯褒が神滅論を口実といへども、元是魯褒は何の者ぞ。神滅論を著しるしたるとぞ。彼人実に貧を苦しみ、利を忘れのるべんや。千宝が搜神記に所謂青蛛の子母殘のごとく、九十八文なりと。利を貪るべんや。又是貪利の人を識るべし。当時の小説なり。されば世俗の常言に富をいとはのみ。三ツ[illegible]ると。彼利の為に事を缺、恥を被、義理を缺く。これを三ツの富といふ。事を欠くは富といへども貧く、恥をかれ義理を缺く。賤しきの終なり。抑我日本国は、士農工商のくをを守て貪ぶべし。されども君子国と。且天神、こゝを開たまふ。神道唯一の上国なり。神は正直の人を護る。この国のごとく、貪婪の人を開く。その利を今は[illegible]。されども貪婪国と。彼天竺を仏国と唱へ唐山を儒国と唱へるごとくあはあるべし。つゝしんでこの国の人気を考るに、罰は重くして賞は軽く、利の為に煩悩甚だしきなり。奴僕ふ思るべしと。考るその不良を禦ぎ、その禍をのがれ、世の人の憂をはらはず。家ふ巨萬の財を積とも、子のなきを苦まず。夫天道は盈るを忌、貨悖而入者は亦悖而出ず。窮達の道殘ふあるべ。堯は虞舜を畎畝より挙げ、孔子は顔回を賢として誉べるべ。徳は本なり。殘は末なり。本を外ふして末を内ふ殘るべは危し。かるが故ふ君子は利をもつて利とせず、義をもつて利とするといへり。曩ふされ殘ありとて、法師の救ひを求し、生を貪り、死を[illegible]ふあるべ。彼ふ難ふ乗じその利を受ん。これ恩とする不なり。されどもそれ又利をもつて彼ふ戯るのみ。彼ふ[illegible]その非を悔ひ恥て衣裳を返せしとい[illegible]。されば仁をもつて人を救ふとは、

人その恩を感ぜざるべからず。利をもつて人を救ふとは人これを恵とせず。殘ば人の為に稲を刈りのこの穂をもつて藁を久さ。孰れも飲ぶべき。人の為に畔を造るのみ田へ水を引くこあり。孰れも飲ぶべき。殘あるのみ。人の火急を救ふ如きもこれに何ぞ。その利の為ふるこれ。稲を刈て藁を束畔を造つて水を堰ぐこと。何ぞ異ならんと席をうつて説破きば。洞臭啊とうち笑ひ子貢は貨殖を欲て。孔子に噴らるこ。范蠡は至る所ごとに富り。子貢范蠡の才あるとも。利を捨てよく貨殖はんや。我人の火急を救へば彼亦これに報ふに殘を。すてこれを返せり。人の為に稲を刈とは。一斛の粟あつてその一斗を取らんこは孰れこを欲ばざらん。人の為に畔を造るの百斛の水をきり。一斗の水を田へ引く。孰れこを易ばざらん。利は金錢乃融通

なる所。車の輪のごし。貧きものは富里に来る。その陰を蒙んを希ひ富人は貧地へ来る。その里ごとに賑ふ。貧福は影と形のごし。影は形に隨て動くものこ。形は影に隨て動くこと。もん牙は彩るこれは形なり。こを言に隨へべ。とあるこまつて登れば。義兵衛きこいふ。子貢が殖范蠡が富のごし。財を聚めこれを散ずこ。なる有に。子貢が里に貧きものなく。范蠡が子孫財用に足る。その國人は富こば。財を積ども散ずこ。所に飛ぶ。馬援が所謂守錢の虜こ。なれり。一家は富といふ。郷黨は寒く。一牙錢を積といふこも。親族は餓こ。といはせもあるべ。洞臭忽地気を変て。女こが好惡によつて。剥ぎこる衣裳にあつたこが仮を食ひこが酒を飲こ腹のよるこ。さまざまの廣言吐て惑さんこと。実に秋月

の変を弁るゝ誰うあり。者奴追ひ出せと罵るべうけあつると同答して大の男二三人次の間より走り出六尺棒を閃して打ちふさんと競ひれば義太兵衛は大きゝ怕ぢ牙を跳らして走り出足を信して逃るる程に。その日も既に暮ぬ宿りを人もあらざれば。今宵は家宿と忍び宝ぬて。森よりの鐘をきゝそふ丑月を燭に四五十町走つらんと思ふ比。天結陰て道いと晴く左手右手の叢より。燐火隠々とゝえあり。煙のごとく人影さるを。あやしやと見久まべらの世の人あはあらざりけり。或は庫の漉とのち。或は千両箱をりくゝえ。ゴブ金くせと呼ぶ声の。志はがれてりの凄じく。身の毛いよだちて。二目とも見るべうはおぼえねど。こそも捨ぬ身なるまゝ。ぶつつと足を踏ためて左右を見と眺つけ。法ホ八巳譬家の一公欲生る日は牟利の奴となりて。血の先へ火とゝり。死して魂

狼の鬼となりて。煙の中に形をあらはせ人生まれて静るは天の性と物に感じて動くは。性の慾なり。その形めをりて慾あり。死して何の慾あらん。真の幽霊あらもあらじ。狐狸の所為なるべし。本の形をあらはさゞれば。生皮剥んと罵るべ。怨霊けゝとゝ笑ひ思ふ正紙に人多人の命終りて人皮肉ことく朽も腐もせん。惜きは一死の怨念は骨と共に朽ることを。夫愛情の深は賢愚共に子夏は子を死して明を失ひ石雄悲慕して風を発せり。亦日の本の恵心僧都は常に西方極楽の蓮花臺に生ぜんと願ひ。ひしべ迁化の時火葬に成る胸膈の中に蓮花あり。亦唐山の一女子常に山水を愛せゞ。死する後その胸骨を見るべ山水のごとく。刻るゞ。と博物の物論を。弘てもなるとあり。されば吾俗は今殺に生情しられば。胸中数万

の金銭あり。その怨念の骨ゆるるさふ。雨の夜風の夕べに幻よ出くわれい。
ゴゥ今人せと呼ぶぞと。凡慾ハ有用のるゆ為くして。空盃の弱ゆ厚き
ものゝ。こゝ人情の常とする所。死をるものハ金銭ゆ用ゆ。ゆゑ
これゆ是情して忘れ。死ハ空盃の慾ゆり。されば世ゆ人も貧き
親族を救ひ。郷黨を賑し。先祖の墳墓を再建。子どもの為ゆ苦
師を擇ぶ。家の破損を修覆るんどハ。有用の所るるれば。金銭を惜ま
餘酒ゆ酔り。衣裳ゆ美を尽し。拉山歌水ゆ日を費し。媚を浮屠家
ゆ求め。子どもゆ絲竹艶曲をるゆハ。るるるんどハ。空盃の所為るれば
金銭を惜まど。りこの空盃の費を省き。人ゝ有用のるのゝ。せば。
人物世界ゆあるまい。困窮止とるるべし。その空盃の費ゆよりて。
孤民妻子を餓ゆのゝ泰平の餘沢ゆて。彼が空盃の費を以て。

ゴゥ有用の用ゆ死。これ所謂塘とるて水を蓄せば下流の人これを汲が
如し。彼春の末の一朶数百花るるゆ。果ハ十が二三ゆるるに。花ゆ空盃
るる為ゆ美く。果ハ有用るるゆゆ。且その花を愛して。落花を惜
むものゝ豈果を食ハ為るゆんや。君それ是をもり亦各嘗ゆ二ゆあり。
貸ざど借ど。衣食を求て残を積て己を固して。人と交ゆざるを孤陋
とゆふ。借て返さど。衣食ゆ豫て。儲をるゆ。己をゆるして。残を裏を好
曲とゆふ。るる為ゆ云積残の家ゆハ餘慶あり。借金の家ゆハ餘殃あり。
君今好曲を措て。貪婪を責ると。死ハ天の悔をゆるして。その子の不
孝をゆるゆゆ。生理学をるゆて世情ゆ情ゆんゆ。ゆゆ祝鮑ゆ
佞を学び。宋朝ゆ美ゆ扮して。蔭を此國ゆ蒙りゆ。富家ゆ瘦
拘るゆ。立ゆべ大木の蔭。苦して浮世の雨を避んと草の原なる

長物語より夢想兵衛ハ声を激し。述べるる怨霊ども。賢者ろ
その子を悲しと両眼盲目女その夫を慕ひて辰伯とるしとハ皆
至誠のいたる所ハ争念残ハ愛惜とる。夫婦と笑ひくべ。楚
書ハいハぐや。楚国ハ有て宝とするとる。惟吾ハ有て宝とせ汝ハ
り。一善ハ有てむとをよくもちぶべ。万金ハ愛惜せず。且子孟の費
とりて。有用の用ハ宛るべどもハ呉客が不亀手の薬ハ如し。
これハ財の罪ハあらぐ。呉人の賢ハあり。ろぐ公田ハ両ハ〻ぐハ〻ぐ
私ハ及ーぐ。各嗇ハ慾の害ろり。故湯も亦慾の害ろり。入と
生ずと呉るのこ。その各ハ異るとる。この為ハ世俗の常言ハ頑
城買の糠味噌汁とハ〻ろあり。凡淫酒とろとて。財を惜ざる者
もその志ハ〻ぐ賤。邪曲奸悪ハ論ずるハ足ぶべ。世ハ各嗇と

倹約をひろハおぐえろりのあ。殊ろ紙ろども散〻ろ紙ろ。
貪て施とをとりハ。恥をもぐ敬をもりハど。利ハろて行ひと汚
とりのハ。各嗇ろり。衣食を薄くして非常ハ後へ費を者ろて私服
の貧ろりのを救ひ裏ハ散〻し。倹ハ恵ども殘らぐ。
ざんぞも然ろぞ。至と倹約ろハ。貪婪国ハ倹約の人ろり。金銭ハ
国の宝ろり。天且くこれハ貸ろとも。長くこぶ物ハあらぐ。今日入ろり
あれば明日ろるのぐ生ずとあり。その融通ろる工人の呼吸のごとく財
且〻くその家ハ栄ぶるハ。人ハ息の長さろり。財頗ハ生〻ぶるハ
生る息の長さ工人の呼吸ハ昼夜止ろる。金銭の融通ハ如ぐ
何ぞ〻くこぶ家の子孫人。この方ハ。その又富とりどもその子ろ
貧ろりの子。先祖の徳ハ子孫その富を積りのあ

ひさこ
ひさこ

ともいまだ百世に芳流するものを見ず。志あらバ萬利ハ一銭に志すべし。
富ハ屋を潤し。徳ハ身を潤す。その損益ハ利と名とのミ痛さかる汝ふ
この理を暁らずて。金銭に愛惜して遂に貪鬼となりぬ。北條九代執
権たりしも。泰時の寡慾によれり。足利十三代武将たりしも尊氏の
めのざすこと志あらざるもなし。人寡慾なるときハ百拙を補ふべし。富
ハ天命の故なるところといふべからず。この両将ハ。別に稱すべきこともなし。ず
寡慾なるものにかくのごとし。さればと説示せば。怨霊を呼もあへ
ず小賢や。汝利を捨て名を稱す。名のくちハいかなるものぞや。利
を捨て汝がごときなるべし。孰かそれに与すべきぞ。ひとち殺して吾業が黠計
にせんと。腓立て或ハ朽たる卒都婆を引抜き或ハ枯木の枝をへし折りて
兵衛を打ねども。五體靡きて声さえなく。土嗟この野のつゆと消ゆ。

消ゆやとおもへる折から。東の方より紫雲たなびき光明赫奕として。
四方を照せバ。今まで有つる怨霊ども。みな消ぞく失にけり。夢想兵衛ハ心
やふやれよりて身を起し。かゝるときハ奇なるかな。雲ハたちまちひきさかり
て地をさること六尺ばかり。童顔仙骨長髯白眉の翁忽然と雲の中に
立ちたれバ。夢想兵衛是を見て膝を屈め。汝を低神仙これを救ひたまへ。救ひ
たまへと叫びければ。その翁莞爾とうち笑ミ。直言の人ぷらく怪むこと
なかれ。われハ名利の徒に嬲かる。正真の福の神なり。近曽この地へ現
化して。百姓の童子にのりうつり。貪利の害を示すといへども。凡人さらく
信仰せず。ぜひなくこの土を去らんとて。雲に閉られ飛ぶしが。はからず雛
僕をとゞめて小戻し。六同憂を相憐むの老婆ふらむ。やや黠計の浦
嶋に由縁ある和郎なれバ。外のこともひつねこの

國。ぬしが才でいかばかり。諫言は耳に逆ひ。良薬は口に苦し。人の不善を責るこそは後の患をいふせんとは孟子の斜教。されば彼大賢とも。ゆんぐ道を亟あはゆれど。森の宣王は説とも宣王これをそぐらに寡人貨を好むといへば。貨をよろこぶを親さ。そをこのむといふとも。そをよろこび説けれども。それぞ遠いとくあるやこそも聽ざり。德を千ば高芳を夏賣るやうと不域よさまる。昔も今も人情よそとかろことはみー。もしが取方老子どのが不善人は善人の。そけやといつまでも貪婪國の人どもそ。取る而のうのいでばなー。放蕩國や好曲國と比べばその益あるふ仙されども。金貨のことの甚しけれ。好曲國と緣を結び小利大損の患あり。深山は貨あり。貨をろるるものをなるもひ。罪人罪なり。王を抱て罪あるとは。ふ宗旨の姑文句。そのあるいとのそをよて貪るなの

あるのあは。天道が大金紙をうけさせるのはど。人さえふをを出さぬ。たべーーーれぞいよ。と捨ど取るべよ己と紫。正直ふそのるのふ。一の富をおとーのふが天の配剤。貨ふるいのは。慾ろ友は天道が忘はぬ貨を授るは。慾なるもいーぬのの。不義の財を貪るる。王を抱ば罪あり。と牙ふ應ぬ手沢ぞめー。この結が腹へおそるれば。一生をするのれど。飲ねば茶も功能なー。されば富も貧るも。面くのそろよありて。金錢のえあはわぞ。真の福といふのは道を吹て名をちり足ることをあるてその外を願ぞ。德を脩て業をーのこ。名沢拙て尊敬されー。妻子和合して。不孝の子ぞるー。親戚和睦して。不義の奴僕るー。人その名沢称ー。友その悞を生るとは。人間の富貴極るー。この友よ。ふるはこれ貴人といふ。人その名沢稱する。は。絶言おそべ。友その悞を生る

これハ改るに便あり。賓主相對して夜話するに官をいへど。利を盧
ぞ采録を問ぞ。艶曲を奏せバ。人の短きを責ぞ。己が長きを說ぞ。学
不圀の為よ益あらんことを先おして多く学ぶを久しれ
とれハ惑ぞ。学を事けまーバ忘まーぞ。草野よありて衣冠の古実を
辨じ。壮年ふして千古の治失に通じ。一夜の清談。百世の亀鑑とも
なるとおらバ。人間の飲楽極まり。既よその志富て飲楽彊なからん
ふハ孰りその外を求めん。陸梭山が格言に。貴きハ聖賢するより貴れ
いなし。富ハ道徳を畜ふより富るハなし。貧きハいまだ道を学ざるより
甚きハなし。賤きハ恥を知らざるより賤きハなしといへり。かれバ貪婪の
人富貴とする所ハ君子これを貧賤とし。貪婪の人貧賤とする所ハ。
君子これを富貴とす。世よ七福神とて祭るを見るよ。福禄寿老ハ南

極星なり。布袋ハ明州奉化縣の弱法師。まづら弥勒の化身と
稱ぞ。辨財天ハ閻浮の長姉吉祥天女と一体なり。吉人よ福を毘沙
門天ハ水徳の神。或ハこれを種々門天と稱ぞ。その神の主る財宝ハ三千
世界ふありぬまれど。只吉人ふこれを授て貪婪不吉の人ふハ授けぞ。
されバ吉人をたすけるなれバ財あまりてりとあまし。毎日須弥山三つあれど。
これを積て燒捨なりと籤篋内傳の注よあり。夷大黒の說ハ一定
なからねどその福神とする所以ハ。おのく異なるべけれもあらバ。志られよ
凡夫ハ福の福よるよう欲むらバ慾を恣ふして一善の行ひなけれも。
その神ふちふ佞媚なるべ。金銭を授かんかるく。不報の福を祈る
こそ惑ひのうへの惑ひなれ。宝とるんハ金銭のみのとなさバ。子なれ
りみも。陰徳を積とれハ孝順の子宝をさづかり。おなれもの習ひ

学ぶとは情を鑒慾を禁め悪をるさぐれ。身の宝をるる。今の生きて古をるは。心の宝なり。師に従て道をぢくは耳の宝なり。字を清て経史を読は目の宝なり。身の臭きを洗ひて煩悩の垢を去るは。鼻の貨なり。言を慎て禍を脱るは口の宝なり。書法を熟して。四方の需に應ずるは手の宝なり。常病みて。萬里を往来するは足の宝なり。徳を備て。庭の刻を送るは。子孫の宝とされば福は業を勤るにあり。壽は身を有つにあり。これは天下の人を守る名医。正真の福の神なり。凡夫の信ずる。慾の神あはれ。舜は畎畝の中に生まれて。富四海をなしぬ。孔子は宋魯の名家にして。東西南北せり。その位を得ずして。人力のなすべきあはれ。

なれども。富貴は知るべからず。孔子はいとうるおしく。悲しみて貪婪の図人。ぶる神祇を学て。狐狸の妖言をとく。下士道を聞けば。かのごとく笑ふ。笑れば。かつて道とるに足らざる。是ぶる神威のあるはざる所以。況て汝が論ずる所は。是非相半せり。その身聖賢にあらざるに。聖賢の口まねをし。又危くもあやうし。夜も深し。且くまもなく。寅八て。蘇枋保の小横一ッを投与へ。忽ちにして花去りぬ。夢想兵衛は忙然として。そぞろ〳〵そろ〳〵を伏拝を草を裾に小横をうち殺て。とろ〳〵と目睡ば。その夜はいとしの明月。椅に求食るの声あり。驚き覚て岸破と起ばがさく。と青きるを何ぞとえまば。福の神の授ぶ〳〵小横に小横にあらで。いねる頃を慾囲おく。ぶる夫ひとり紙老婆なり。ちよ至るまで。驚きそは彼福の神も亦是隠嶋仙人なり。賢ぶりて口利ると戒めその紙書に。

彼行を励し給へ欲あり。吾子。有ぐ子。と感涙頻に紙老眼の。羽をぬらしてその中に。母子と家をば寄こ妙。紙鳶は木の梁の筆入をくおのづから空中に閃きの。りて立地に雲の中にぞ入ふけれ。

○摠評

慾は七情の主なり。苟も利を先にすれば奪ざれば他ぞ。夫利と害とは相離し人その一分を安くせざるを困窮といふ。その一分を安くするを富貴といふ。足ることを知るのは富貴をもとぐれば窮も。周公の才の美なりとも。驕り且吝なれば。君子はこれを嫌ふ。何ぞ義を捨て利を取べき。易に乾元亨利貞といふ。利はよきと訓。害は そこなふと訓り。その利のよろしきを以てこれをそこなふものは慾なり。人は萬物の霊にてその智万物に長ず。上智は利を捨て害を退け邪智は利を温て相害を。貧富は天のなりとぞ。その道をもつてなるとぞ。利あつて遂に害は。鳥鵲燕雀のごとき寡慾なる友よ。利を薄くして分を守るのみ。彼数百の烏叢林の中にあり。朝に出て東西南北を。その毎日に求食とぞ。必方あり。常に南方に求食烏り食を東方に求るとぞ。その地の烏ども。を責て。後日食を獲さるべしといふ。その烏や。反哺の孝あり。久しく大人君子に稱せらるべしとぞ。その智の足らざるが友よ。吾を行て善を志べ。浄けれども汚れを厭はど。戎は小鳥を追ひ蟬を捕。或は死人の腸を食ひ牛馬の斃を聚ふ。吾行あまたども異類を傷ひ浄けれども汚を厭ざるかあらざるや。人の性の吾なるも一挙して教るべし。烏鵲よ

及ぶることあり。烏は分を安くして母に孝あり。貪婪の人祿を獸に
殘忍の人忠孝をもつぶ亦彼燕雀の智は烏鵲の下にあり一花
半朝さまく覆車の轍をみるその臆を備ることあれば偕ぶ
亦外と求めどその穗を啄とれ一トたび喙めば一トたび仰ぎ左
右顧右ふるの及ぶ。利の為に害を忘れど人は動もれば利す
ることを害を忘るこ沢りて燕雀ふじも及ばざることあり。人とて情を
禁め。慾を割とを必ずん道を安ずるの惑るべし。譬はいは樓閣成
て燕雀相賀とも。その分をもるかよ。その亦を治そ相ゆるこ。
亦鵲は年の後は巣を造るに大乙に向いて大家を背ふ明年
大風あるべきを知りて。その巣を低くとも彼その風信をもるこ
は人の及ばざる所なり。もんども。その巣の低きを為るに雛を童子に

獲らるるをもつぶ。奸智の人又これに似る。伎倆技計。君子
も欺くべし。もんども。その利の為に害あるを知らぶ。もんを
りてこれを捉ぶ利と害とは相去ること遠しぶ。富貴もその道
をりて得ることふは。辯をべくして。貧賤もその命をもれとも。
恥るふ。只その分をもるとれは安く。貪るとれは危し。もんども。
恭く世の童子ホに告。聖賢の言は我て経史にあり。もんども。
或はいまこれを続ぎ。或は続とも。その義を解もるふ至ぶれば。所
謂馬耳の東風なん。この為に先哲これを和解して国家に写し。亦
淡解してその義を明ぎ。今はおいく徐師の書に多しぶ。更に
愚が言を待ぶとなくぶ。信言矣のごぶる亦に。続に施て巻に
蓋さるものもあるべ。この書のぶれは蘆唐にて学べきものなれも。

却聖諭をあげて途に続の罪をゆと。只戯謔ばかり。虚をなざるの微意。他者の用ゆるべきを責るあり。且詩ばかりの四囲の光景。たゞめかい色を誠め。中ハ闘を誠め。後ハ酒を誠む。童子ホたゝよろせよ。続で孟子とハ。小補するハ多くと。仏者ハ踊念仏あり。亦唄頭目あり。且征鼓をうつたゝれを離と。その上戯謔ハ仰ばれど。冥福を祈る功徳ハ一なり。戯謔もちひよりなづ。彼豈戯るゝんや。彼豈戯るゝんや。

夢想兵衛胡蝶物語巻之五終